

医事・文談 九百七十 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その258

子規周辺の人物と(八)

前々回、松山藩は15万石の親藩であったが、幕府の要職に就くような藩主を出したわけでもなく、坂本龍馬、板垣退助の如き、幕末の討幕運動や、明治維新後の自由民権運動を首唱した人物を出したわけでもないと言った。

親藩だから倒幕など以上の外であり、維新後も気候温和な伊予人士は過激な変革を好まなかったのかもしれない。

いま、ちよつと『日本史辞典』(昭和41年、角川書店発行)を見たら、伊予松山藩主・久松隱岐守定昭が、慶応3年(一八六七)9月から10月まで、わずかに1カ月老中をつとめているのを見出した。

しかしこのほかには、久松氏で江戸幕府の要職(老中、三奉行、所司代、城代)などに任ぜられたのはいないようだ。尤も、老中の下の若年寄には、譜代の小禄の藩主を任命したが、いまその氏名を明らかにすることができない。12万石の久松氏は、小禄とは言えないから、若年寄に任ぜられたことはないであろう。従って、江戸幕府は二百年六十年余の間、久松家で要職についたのは定昭だけであろう。

このように傑出した藩主のいなかつたにしては、明治時代にはいつてからは、愛媛県は人材に乏しくない。

それには、岩村高俊らによって県下に鼓吹された自由民権思想と、青年の中央指向と、久松家によって設立された育英会の常盤会によるところが大であろう。

中学生になった子規らは、演説に熱中したらしい。子規の演題としては「自由何クニカアル」諸君將ニ忘年会ヲ開カントス「天將ニ黒塊ヲ現サントス」が「無花果艸紙」という文集に、演説草稿三篇として収められている。政府の

「圧制」を論じ、「黒塊」は「国会」を諷して、暗黒世界を照す光輝を發する一つの黒塊を現出すべだとしてゐる。この演説で、弁士は中止を命ぜられたと、友人の柳原極堂は言っている。

「弁士中止」、更に集会の「解散」を命ずることは、昭和期の無産政党や労働組合の集会によつてもしばしば臨検警官によつて行使された。

演説はいずれも、明治15年12月から16年1月までに行われたものであるが、注目すべきは15年12月17日青年会で行われた「忘年会演説」である。

その論中に左の如くある。

「河流ハ鯨鯢ノ泳グトコロニ非ズ(中略)。海南ハ英雄ノ留マル処ニ非ズ。早ク此地ヲ去テ東京ニ向フベシト。且ツ余ノ察スル所ニ依レバ、余ノ勸メヲ待タズシテ、諸君ハ將ニ来年ノ前半期ニ於テ此地ヲ発シ。一声ノ汽笛ト共ニ京城ニ向ハレントス。実ニ松山中学校生徒中ノ英雄ハ皆將ニ尽キントスルナリ。因テ余ハ寧ロ今ニ於テ諸君相集リ、以テ訣別ノ宴ヲ開カレンコトヲ希フ。而シテ是亦忘年会ヲシテ兼ネシムベシ。是レ余ノ忘年会ヲ開クヲ欲スル所以」。

これによると子規ら松山中学校生徒は、海南(伊予地方を指す)に在ることを欲せず、東都を指す、或は目指せと激を飛ばしているのである。当時、子規の特に親しくしていた「五友」と称する交友があつた。

それらは、三並良(東大文科大學卒、のち一高、松山高校教授、ドイツ語学者)、竹村鍛(河東静溪の3男、碧梧桐の兄、東大文科選科卒、子規が県立神戸病院に瀕死の身を横たえていたとき、同地の師範学校に職を奉じていて、子規を見舞う。のち書肆・富山房に入り、辞書の編纂に従事。子規に先立って明治34年2月1日死去)、森知之(陸軍大佐で退役)、太田正躬(後

年、大阪で実業に従事。子規、神戸療養時、大阪市立商業学校教諭で子規を見舞う)である。

その五友の松山出発の年月日は、三並が最も早く15年7月16日、次いで子規の16年6月10日、以下太田の16年7月20日、森の16年暮、竹村の18年4月5日である。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目

TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233